

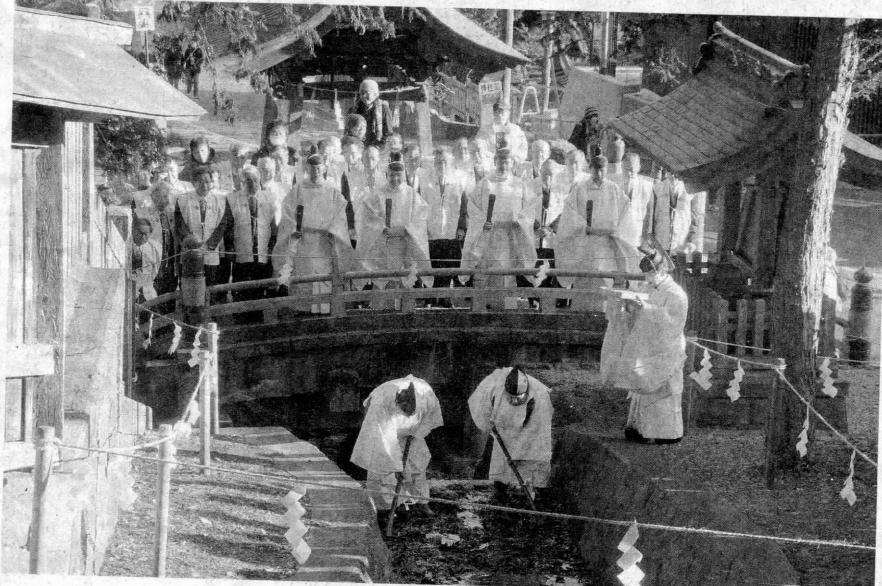
□寄稿□

諏訪大社上社
蛙狩り神事

鮎澤 毅

諏訪大社の蛙の生贊祭りは全国的に見て特異な神事である。元旦の事始め、上社の本宮で宮司以下祭り委員が見守る中、社前を流れる御手洗川に仕丁二人が入り、神鍬を持って水を割る。蛙二匹を生け捕り、これを三方にのせ、拝殿において柳の小弓・篠竹の矢でその胴体を射抜き、幣拝殿の神前に捧げ、宮司は「蛙狩の神事仕いまつりて…」と祝詞を捧げる神事である。中世初頭に書かれた『諏方大明神画詞』には、斧をもつて水を切り、出現した蛙を檀上で小弓、小矢をもつて射取り、串にさして奉る、と記されている。古代の人々は、狩猟や農業によって暮らしていたが、生きた蛙をもつて祭事をすることは、上社特質の一つである。続いて、御頭御占神事が行われる。今年諏訪大社に奉仕する地区の内から占つ

て決定する神事である。宮司の前に白具一式を入れた箱がありこの中からわら馬を出して馬の背剣先板を立てる。和紙に「内県介」と書き、剣先板の上に小刀で止める。竹筒に立っているススキの軸の籠竹によ



御手洗川に入り仕丁が神鍬で蛙を捕っている光景
平成22年、筆者撮影